

# 底 魚 資 源 調 査\*

小川 満也・阪本 俊雄

## 目 的

本県沿海の底魚資源と漁業をモニタリングして、資源の合理的利用についての研究を推進し、漁業の安定と振興に資することを目的とする。

## 関連事業と調査の内容および結果

ここ2, 3年来国庫委託及び補助事業として、同じ事業ではほぼ毎年一定している調査基準に従って、調査は経過している。本年度実施された底魚資源関連調査事業と成果の概要は以下のとおりである。

- (1) 200 カイリ水域内漁業資源総合調査
- (2) 瀬戸内海漁業基本調査
- (3) 底魚資源調査
- (4) 回遊性魚類共同放流実験調査事業

(1)は、標本船調査として、

加太漁業協同組合	一本釣	1 隻	(4~3月)
湯浅中央漁業協同組合	"	"	( " )
白浜漁業協同組合	"	2 隻	(4~5月, 10~3月)
印南町漁業協同組合	延縄	"	( " )
雑賀崎漁業協同組合	底曳網	1 隻	(4~3月)
塩津漁業協同組合	"	"	(4~12月)

を、生物測定調査として、

マダイ(体長測定)	加太漁協市場	(4~1月)
"(体重測定, 全数)	印南町漁協市場	(4~5月, 10~3月)
"( " )	白浜漁協市場	( " )
クルマエビ(体長, 体重測定)	雑賀崎漁協市場	(5~11月)

を実施し、それぞれの調査結果を取りまとめ、担当水産研究所に報告した。これらは200カイリ資源調査集計表として整理取りまとめられており、資源評価は200カイリ底魚資源研究チームによってなされた。

(2)は、同委託調査要綱に従って、雑賀崎漁業協同組合所属標本漁船のエビ類ならびにヒラメ・カレイ類を一あるいは二曳網分の全数測定をし、担当水産研究所に報告した。結果は「昭和58年度瀬戸

\* 漁業資源調査費による。

内海水産資源担当者会議議事要録」(昭和59年3月, 南西海区水産研究所)に収録されている。

(3)では, 同委託調査要綱に従って, 田辺湾小型機船底曳網漁船の小型エビ類について種組成と体長測定を行なった。標本は田辺湾内を漁場とする当漁船に依頼して採集されたものである。種組成は資料9, 主要種の体長組成は資料10に, また, 湾内を漁場としている田辺漁業協同組合小型底曳網漁業の出漁隻数, 魚種別漁獲量を1982, 1983年度について資料11にそれぞれ整理した\*。図1は1981, 1982年度報告に示している田辺湾小型底曳網出漁隻数とエビ類漁獲量の経年変化に本年度のモニタリング結果を加えたものである。出漁隻数及びエビ漁獲量(3類とも)は1982年度よりも増加し, ことにクルマエビ類は約4.0トンと1980年の4.6トンに次ぐものであり, 小型エビ類も1976, 1977年に次ぐものであった。図2も, 1982年度に報告している田辺湾小型エビ類種組成の経年推移に本年度の調査結果を加えたものである。ミナミアカエビは1982年に激減し, 1983年には壊滅的に減少した。一方, サルエビ類は

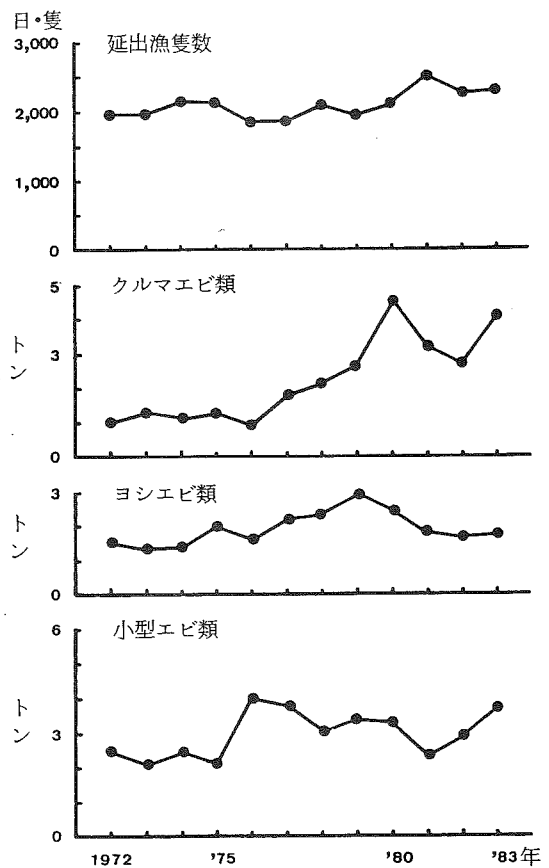


図1 田辺漁協小型底曳網出漁隻数, エビ類漁獲量

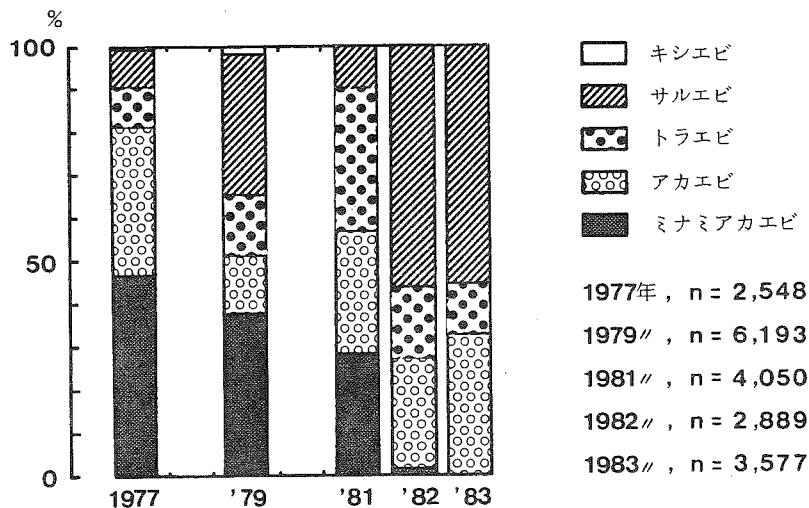


図2 田辺湾主要小型エビ類の年別種組成変化

\* 1972 - 1981年度分については, 本誌昭和56年度版に掲載。

1982年と同様に高い割合を占めている。

1973年に林<sup>1)</sup>は大阪湾のエビ類を調べ、1955、1956年当時と比較してアカエビ、トラエビは激減し、その分だけ有用小型エビの漁獲量が減少し、1971、1972年における漁獲量はほぼサルエビ単一種によって占められていることを報告している。田辺湾では、ミナミアカエビの減少分だけ、サルエビが増加しているとみられる。

## 文 献

- 1) 林 凱夫 (1974) : 大阪湾におけるえびこぎ網漁獲物組成の変化について。大阪水試研究報告, 4, 76 - 91.